

## C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

私のイタリア留学体験記

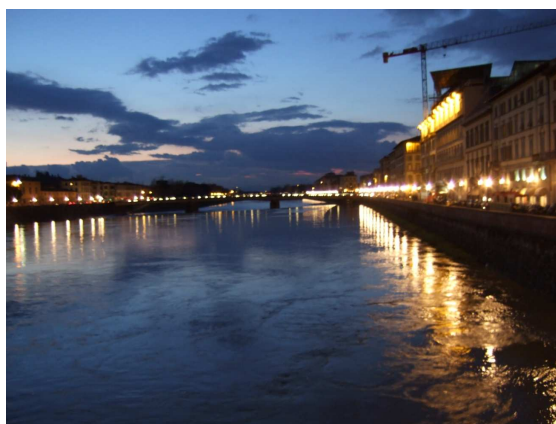
## \* 憧れの街、フィレンツェへ \*

藤井 あゆみ

昨年 11 月、私は大学卒業後のイタリアへの一か月の留学の相談をするために、日本イタリア京都館を訪れていました。初めての留学ということもあり、不安でいっぱいだったのですが、どうしてもイタリアに行き、ヨーロッパでも随一の美術や文化を生み出した風土にじかに触れたいという気持ちを持っていました。はじめての留学ということで不安だった私の細かい質問に丁寧に答えくださり、出発直前まで相談に乗ってくださった片山さんには本当に感謝しています。それでは、2 月 13 日から 3 月 16 日までイタリアに留学した私の体験談を紹介させていただきます。

私がイタリア語を勉強し始めたのは、大学の三回生からでした。もともと、英文学専攻の学生ということもあり、言語としてのイタリア語の美しい響きに興味を持っていて、イタリア人のようにうまく話せるようになりたいと思ったのがきっかけです。また、幼い時から絵が好きで、イタリアの美術に惹かれていたこともあって、四回生の時からイタリア語の講読の授業も取り始めました。学部生の時は、イギリスの 17 世紀の詩人・批評家のジョン・ドライデン (John Dryden, 1631-1700) の姉妹芸術論 (詩画比較論) と彼の詩について研究し、卒業論文を書きました。ドライデンが姉妹芸術論の中で優れた画家として挙げている画家ラファエッロ (Rafaello Sanzio, 1483-1520) が、どうやって名作と呼ばれる絵画を残したのかを研究したくて、大学院に進学しました。以上が、私がイタリア語に関わるようになったいきさつです。これから、いよ

いよ私のイタリア留学体験記を、振り返ってお話しさせていただきます。



【カッライア橋からの眺め】

2 月 13 日の朝、私は家族に見送られて、関空から国際線の飛行機に乗り込みました。たった一か月の留学なのですが、やはり初めて一人で海外へというのは心細かったです。同じ機内でたまたま大学のドイツ人の女性の先生にお会いしたのですが、もちろん不安を共有させていただけるわけではないので、フランクフルト行きの機内でただ一人私はこれからどうなるのだろうかかと漠然と考えていました。しかし、幸運にも、隣に座っていた同世代くらいのフランス人の女の子がとても親切で、座席のベルトの外し方を教えてくれ、また、イタリアにも行ったことがあるそうで、どんなだったかを話してくれて、とても救われました。フランクフルトに着いてからは、パリ行に乗り継ぐ彼女とお別れして、フィレンツェ行きの国内便に無事

乗り継ぐことができました。

13日の夕方の6時半ころ、フィレンツェのアメリカ・ヴェスプッチ空港に無事到着し、重量オーバーだったトランクも受け取りました。さあ、フィレンツェの中心街へと、イタリア会館をお願いしておいたお迎えのタクシーをきよろきよろと探したところ、見つかりません。落ち着いて、タクシーの会社に電話したところ、私を待ってくださっていた運転手さんに連絡を取ってくださり、無事タクシーに乗り込むことができました。運転手の Antonio さんは、事前をお願いしていた通り、宿泊先のホテルまで送っていただきました。とても陽気な方で、ホテルに着くまでおしゃべりを楽しめました。私は滞在中フィレンツェで何度か一人でタクシーにりましたが、特に危険なことはありませんでしたので、仮に空港に止まっていたタクシーでホテルに向かったとしても大丈夫だったと思います。ちなみに、私が利用したタクシーは 50 ユーロくらいで、空港に止まっているタクシーだと、20 ユーロでフィレンツェ市内に到着します。

翌土曜日は、ポンテ・ヴェッキオからアルノ川を渡って、フィレンツェの中心部を散策しました。また、ホテルのフロントの方をお願いして予約を取ってもらい、サンタ・マリア・デル・カルミネ教会を訪れました。ホテルのフロントの方は英語が堪能でしたが、何とかこちらがイタリア語でコミュニケーションを取ろうとすると、イタリア語で対応してくれました。現地の方と、その地域の言語で話す機会が最も多いのは、やはり一人旅の場合だと思います。



【レベル2のクラスメート・中央が Renata 先生】

日曜日には、予定よりも 20 分早くアパートに着いてしまい、どうしようかなと思っていたら、大家さんの Sandra が、「Ayumi?」と親しく声をかけて出迎

えてくれました。私の部屋は4階にあり、Sandra と必死で例の重量オーバーのトランクを運びました。私が滞在したのは、学生共同アパートで、同居人には同じ日にアパートに到着したスウェーデン人の Josefin がいました。彼女とは主に英語で話し、一緒にスーパーで買い物をし、次の日から始まる留學生活の準備をしました。Josefin は、私よりも一つ年上というだけなのに、すでに働いていて、滞在費や留學費も自分で払ったという、とても自立した女の子でした。また、料理が上手で、私が風邪をひいた時には自分の料理を分けてくれる親切なルームメイトでした。学校 (Centro Firenze) は、サント・スピリト地区という、フィレンツェの中でも比較的落ち着いた静かな場所にありました。朝 9 時に学校に到着し、クラス分けテストを受け、レベル 2 のクラスに入りました。クラスは男性 2 人 (ドイツ人、スウェーデン人) と女性 2 人 (どちらもオランダ人) の親しみやすいクラスで、私が教室に入ると、先生と一緒に「Ciao!」と言って出迎えてくれました。彼らとは、食事を共にしたり、授業以外にもイタリア語で話すなどして、親睦を深めることができました。先生の Renata は、他の生徒よりも遅れをとっている私を気遣ってくれて、分からない言葉はすぐホワイトボードに書いてくれました。ただ、先生とはいえ、自然な速さのイタリア語で話すので、聞きとるのに必死でした。私が分からない言葉を電子辞書で調べていると、ヨーロッパの生徒にとっては珍しいらしく、「辞書なの？小さいコンピューターだと思ったよ!」と驚かれました。

文法は、2 年間日本でイタリア語を勉強していたので大丈夫だろうと思っていましたが、代名詞の ci, si, ne の使い分けに苦労しました。「Non ci credo.」「そんなことあるか、うそだろ。」のように慣用的表現になっているものもあれば、「Ti piacciono i film di Fellini?」「君はフェリーニの映画が好きかい?」と聞かれて、「もちろん、全部見たことがあるよ。」と答えるのに、「Certo, ne ho visti tutti.」ではなく、「Certo, li ho visti tutti.」と答えなければならないなど、ne は di questa cosa、つまり「～について」という時に使う代名詞だということを理解しておかないといけないというのを先生から聞いて、納得した文法事項もありました。日本でも日本人の先生から聞いていた説明だと思います

が、Renata からイタリア語で例文を用いて分かりやすく説明されると不思議と頭に残るのは、留学の醍醐味だと思います。また、Renata は私たち生徒のイタリア語の会話で間違っているところをその場で指摘して、ホワイトボードで全員に説明してくれました。クラスメート全員の意識が高く、私も彼らに刺激されて、月末に行われる進級テストに無事合格し、レベル3に進むことができました。3月から始まったレベル3では、教科書も先生も変わって、クラスメートも変わりました。レベル2から私とElsというオランダ人の女の子が進級した他は、韓国人の男の子とスイス人の女性が加わりました。レベル3の先生、Domenicaは、私たちにイタリア人の女性歌手、Laura Pausiniの“Io Canto”という歌を聞かせて、歌詞の単語の聞き取りをさせたり、ホテルのフロントでの会話(dialogo)を作らせたりして、より実践的なイタリア語会話に取り組むことができました。私は4週間学校に通ったうち、レベル2、レベル3でそれぞれ2週間ずつイタリア語を勉強しました。授業は朝9時10分から11時と、休憩をはさんで11時20分から13時まで行われました。Centro Firenzeでは、このようなイタリア語の授業だけではなく、午後にフィレンツェの散策や美術館を巡るツアーや、文法の補習クラスなど、生徒が気軽に申し込める催し物も設けられています。日本人は私の他に二人でした。時期が2月、3月だったということもあるかもしれませんが、Centro Firenzeは生徒の数が少なく、その分先生との距離も近くて、楽しい留学生活を送ることができました。

私はこの1か月のイタリア滞在中に、フィレンツェにある教会や美術館をたくさん訪れました。また、日本で知り合いになったイタリア人の女の子にお願いして、その子の彼氏のアパートと一緒に週末に泊まらせてもらい、ミラノのアンブロジアーナ美術館にあるラファエッロの〈アテネの学堂〉の

カルトーネ(cartone、下絵用のデッサン)を見ることができました。フィレンツェ、ミラノのほか、ヴェネツィア、フィエーゾレ、サン・ジミニャーノ、ポローニャなど、それぞれ短い時間でしたが訪れることができました。ヴァチカン美術館のあるローマに行けなかったのが残念でしたが、またイタリアに来て見よう、という目標ができました。心配していたストにも遭わず、この滞在中にクラスメートや友人をはじめ、私は多くの人に助けられました。もちろん、このイタリア滞在自体、私をいつも遠い日本から応援してくれていた家族の理解と支援なしには実現しませんでした。また、一人で生活してみることによって、いかに自分が日頃恵まれた生活を送っていたかを認識することができました。家族には本当に感謝しています。フィレンツェは、ドゥオーモのクーボラやウフィツィ美術館の所蔵品だけでなく、至るところにある広場の彫像や、教会の祭壇画を見ているだけでも、とても心満たされる場所です。イタリアに留学を考えていらっしゃる方は、ぜひ足を運んでみてください。自分の目で見て、自分の足で踏みしめたイタリアの街、フィレンツェの景色は、今も私の中にしっかりと残っていて、思い出すたびに不思議とだんだん濃くなっていくのです。それでは、最後に先生が教えてくれたイタリアのことわざを紹介して、この体験談の結びとさせていただきます。

“Piano piano si arriva a tutto.” 「ゆっくり、ゆっくりすべてに到達する。」

(維持会員)

イタリア発月刊日本語新聞

**COMEVA**  
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC  
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy  
Tel. & Fax : (06) 4743.212  
E-mail : comeva@nipponclub.it  
URL : www.nipponclub.it

お問い合わせ等はNIPPON CLUB SNC宛てにお送り下さい。

## VIVA IL CINEMA ITALIANO !

### 第17回 『シシリーの黒い霧』

*Salvatore Giuliano*

松島 征

前回(3月号)でご紹介した『エボリ』の映画監督フランチェスコ・ロージの比較的初期の作品である『シシリーの黒い霧』(1961)について書きます。これはシチリア島の山賊サルヴァトーレ・ジュリアーノの謎の死をドキュメンタリー・タッチで描いた作品で、その社会正義派的な内容と歯切れの良いモノクロ映像のおかげで、ベルリン国際映画祭(1962)では監督賞を受けました。

この映画のイタリア語の原題は『サルヴァトーレ・ジュリアーノ』*Salvatore Giuliano*。この山賊のことを知っていなければ、この映画の面白さが伝わって来ないと思うので、最初に「サルヴァトーレ・ジュリアーノとは何者か？」について説明します。1940年代の後半、シチリア島全土でその名を轟かせた山賊団の頭領の名がサルヴァトーレ・ジュリアーノです。彼は1922年、シチリア島の首都パレルモから西へ30kmほど離れたモンテレープレに生まれました。1943年、英米の連合軍が上陸し、食料・衣料の配給制度が実施されたとき、当時弱冠二十歳だったサルヴァトーレは、機を見るに敏な性格だったので、食料品の闇取引にたずさわるようになります。ある日、いつものようにラバの背に小麦の入った袋を隠してモンテレープレに運ぼうとしていたところ、運悪く途中で憲兵と森林監視人に見つかってしまったのです。彼は気短で粗暴なところがあったので、隠し持っていたピストルで憲兵を射殺し、彼自身も深手を負って山中に逃げ込んだ。こうしてお尋ね者になったサルヴァトーレは、山中にとどまり山賊になりました。

その翌年には、近郊のモンテレープレの刑務所に収容されていた親族や友人の脱獄を手助けし、彼らとともにジュリアーノ山賊団を結成して、何度も金持ちを誘拐してはその身代金をせしめました。そのようにしてえた金を貧乏な村人たちにばらまき、人気取りに努めたのです。村人たちは長年に

わたり権力者や地主に痛めつけられてきたので、ジュリアーノ山賊団を「義賊」と見なし、サルヴァトーレは「モンテレープレの王」と呼ばれるようになりました。ジュリアーノ山賊団は最盛期には500名を超えたといわれます。7年間のうちにこの山賊団は、150に近い人命を奪ったのです。

彼らが並の山賊とちがうのは、「シチリア独立運動」という政治活動に加担したことです。シチリア独立派は地主階級出身者が多かったのですが、彼らは社会主義運動の盛り上がりにより脅威を感じて、自分たちの利益を保護するために暴力団マフィアの力を借りようとした。農地解放運動を推進する左翼の活動家を弾圧するためには、マフィアの手先である山賊団さえも利用しようとしたのです。このようにしてジュリアーノは、1945年にシチリア独立運動と接触し、「シチリア独立義勇軍」に加入することを承諾しました。

イタリア最大の社会主義運動弾圧事件と呼ばれる「ポルテッラ・デッレ・ジネストレの虐殺事件」(1947)は、ジュリアーノ山賊団の仕業であったといわれます。ポルテッラ・デッレ・ジネストレと呼ばれる谷間に農民と労働者たち約二千人が集まり、ピクニック気分でもーデーを祝う集会を開いていたところ、突然ジュリアーノ配下の山賊たちが機関銃を発砲し、まったく無防備の農民・労働者を虐殺したのです。死者11名、負傷者27名と報告されています。その後もジュリアーノ一味は社会主義運動への攻撃をやめず、次々とテロリスト行為を繰り返しますが、時の支配政党であるキリスト教民主党から次第に見放され、孤立して行きます。ジュリアーノたちの協力のおかげでキリスト教民主党は選挙に勝利しますが、「選挙運動に協力すれば、恩赦でジュリアーノを自由の身にしてやる」という党側の約束は果たされず、怒り狂ったジュリアーノは仲介役のマフィアのボスを暗殺しようとする。だが、それも失敗に終わります。権力を掌握した地主階級にとって、もはや山賊は秩序を乱すだけの厄介もの、時代遅れのアウトローに過ぎなかったのです。最終的には、ジュリアーノは部下にも裏切られ、1950年7月4日の夜、腹心の弟分であったガスパーレ・ピシヨッタによって殺されてしまいます。

この映画の冒頭のシーンは、シチリア島西南部の町カステルヴェトラーノのある民家の中庭に転



がっているジュリアーノの死体のショットから始まります。それから時間軸をさかのぼって、ジュリアーノ山賊団の活動を回顧するのですが、ときどき法廷のシーンやサルヴァトーレの死を嘆く母のシーンなどが入れ子状に(あるいは螺旋状に)はさまれているので、ストーリーの展開を追にくい作品です。にもかかわらず、てんでバラバラに見える各シーンがそれぞれ強烈なイメージを観客に向けて発信してくるので、これはやはりドキュメンタリー仕立て傑作ドラマ(現代のシチリアをめぐる叙事詩)と認めざるをえない。観客はどの登場人物にも同化できず、すべての事件を批判的にクールに眺めることになる。これまでの連載でわたしが繰り返し述べてきたブレヒト的な意味での〈異化効果〉が、ここでは見事に発揮されているのです。それでは、映画の内容を要約してみます。



『シチリーの黒い霧』横たわるサルヴァトーレ(中央)

- 1) スタッフとキャストの紹介がなされたのち、字幕で「この映画は、サルヴァトーレ・ジュリアーノの生まれたモンテレープレと、彼が死んだカステルヴェトラノーの町で撮影された」ことが明らかにされる。いかにもシチリアらしい荒涼たる土地、白い石壁の家々、黒い衣装の女たち、共同の水汲み場のある広場などが印象的。
- 2) 民家の中庭に腹ばいになって死んでいるサルヴァトーレの死体の描写。
- 3) 大地主たちによって推進されたシチリア独立運動の内幕。
- 4) サルヴァトーレ(当時23歳)、「シチリア独立義勇軍」の隊長に任命される(山賊団の首領が独立運動の英雄となる)。
- 5) 独立義勇軍による執拗な憲兵隊攻撃。
- 6) サルヴァトーレの葬儀(挿入シーン)。
- 7) ジュリアーノ山賊団のモンテレープレ周辺の

勢力圏。憲兵隊と互角に渡り合う。

- 8) 300名の憲兵隊がモンテレープレに駐留する。おびえる町民たち。町中で白昼、憲兵が襲撃される。
- 9) 夜間外出禁止令が布かれる。男が太鼓をたたきながら回るシーンが、いかにものどかでよい(事態は緊迫しているにもかかわらず)。
- 10) 憲兵隊と山賊団との荒野での対決。
- 11) 「水汲みと買い物」を1時間だけ許可する」というお触れ。黒服の女たちがぞろぞろと水汲み場に集まってくる。
- 12) 独立義勇軍はその役割が終わり、解散させられるが、恩赦の約束は守られない。生活に困った山賊たちはマフィアに援助を求めるが、その代償は高い。
- 13) モンテレープレを憲兵隊が包囲して、町民たちを山賊団の共犯として逮捕する。黒服の女たちの抗議。
- 14) 墓地の死体収容所で、今は亡きサルヴァトーレと対面する母(挿入シーン)。
- 15) 「ポルテッラ・デッレ・ジネストレの虐殺事件」(1947)
- 16) 「モンテレープレの王」がまだ逮捕されないことに業を煮やした政府は、ルカ大佐率いる鎮圧部隊を送り込む。
- 17) 暗殺者ピショッタの搜索。
- 18) メーデー発砲事件の裁判。被告たちはそれまでの供述を否認する。以下、法廷のシーンが長々と続く。
- 19) 憲兵隊と地元警察の対立。署長と大佐の密約(挿入シーン)。
- 20) ピショッタ、権力の側に寝返る。深夜、ジュリアーノの隠れ家を訪れて彼を暗殺する。死体の後始末。ピショッタの逃走(挿入シーン)。
- 21) 再び法廷のシーン。
- 22) メーデー発砲事件に有罪の判決が下りる。ピショッタは怒り狂い、「全てを暴露するぞ」と叫ぶ。
- 23) ピショッタ、刑務所の監房で何者かに毒殺される。
- 24) ラスト。1960年、ある人物が町の広場で何者かに射殺される。字幕も出なければ、なんの説明もない。これは映画製作時(1961年)のシチリアの現状を暗示しているのだろうか…。

この映画の原題は『サルヴァトーレ・ジュリアーノ』ですが、この名前の人物は、ほとんど死体(あるいはデスマスク)としてしかスクリーンに登場しない。なるほど、機関銃をもって山賊団を指揮するシーンは何度かありますが、よほど注意してみないとそれがサルヴァトーレだとはわかりにくい。映画の後半では、むしろ彼の部下ピシヨッタの言動に焦点が当てられます。その意味で、この作品の事実上の主人公はガスパーレ・ピシヨッタである、とも言えるでしょう。

サルヴァトーレ・ジュリアーノを主人公にしたもうひとつの映画作品として、マイケル・チミーノ監督の『シシリアン』*The Sicilian* (アメリカ映画、1987)があります。これはマリオ・プーゾの小説(*The Sicilian*)をもとに映画化したもので、ここではサルヴァトーレの義賊性が強調され、彼は一種の悲劇の主人公に仕立てあげられています。これはあくまでもフィクションであって、必ずしも史実に忠実な映画化であるとは思えません。サルヴァトーレをカッコよい英雄に見立てたハリウッド・スタイルの活劇なのです。社会主義運動を弾圧し、大勢の憲兵を殺害した彼の残忍な性格は、農民たちの社会主義運動にも理解を示し、マフィアの暴力に敢然と立ち向かう男らしさに置き換えられています。つまりブレヒト的な〈異化効果〉はどこにもない。それでもサルヴァトーレが、時の支配階級(地主、キリスト教民主党、マフィア)から政治のための道具として利用されたという本質は描かれていないわけではない。サルヴァトーレの姉のマリアーナは、社会主義活動家の青年と結婚したことになっています。実際には、シチリア独立運動の活動家パスクアーレ・シオルティーノ(保守派)と結婚したのですが…。彼らの息子(すなわちサルヴァトーレの甥)は、サルヴァトーレの生家のあ

るモンテレープレを見下ろす丘のうえにレストランを構え、小説と映画の人気にあやかって世界中から観光客を集めて、商売繁盛であるとのこと。シオルティーノ氏によれば、「ポルテッラ・デッレ・ジネストレの虐殺事件」は、サルヴァトーレの意志に反して部下が暴走したために起きたのだとのこと。レストランの中には、サルヴァトーレのパネル写真が壁に多数かかっている、義賊の英雄として観光客を見下ろしているのだそうです。

最後に、監督のフランチェスコ・ロージの多彩な作品群を紹介してこの稿を終えることにしましょう。彼は1922年、ナポリに生まれました。1948年、ヴィスコンティ作品『揺れる大地』の助監督をつとめ、シチリアの風土に強い影響を受けます。ナポリを舞台にしたミュージカル『ナポリの饗宴』の映画化に際しては全面的に撮影協力をしました。約10年間にわたる演出家修業を経て、1958年に長編第一作『挑戦』*La Sfida* を発表します。『シシリー』の黒い霧』は長編第3作でした。その後、『都会を動かす手』(1963)、『黒い砂漠』(1972)、『コーザ・ノストラ』(1973)、『ローマに散る』(1975)、『エポリ』(1979)など強烈なアクチュアリティをもつ作品を発表して、カンヌやヴェネツィアの国際映画祭の賞を続々とさらい、イタリアン・ネオレアリズモの巨匠の名をほしいままにしています。変わり種は、ビゼーのオペラを忠実に映画化した『カルメン』(1984)、そしてガルシア・マルケスの小説を映画化した『予告された殺人の記録』(1987)でしょう。

[謝辞] この原稿を書くに際しては、竹山博英著『マフィア シチリアの名誉ある社会』(朝日選書、1988)を参考にしました。ここに記して感謝いたします。

(京都大学名誉教授・フランス文学)

### … 会館 だ よ り …

#### イタリア語とイタリア文学の起源

- ・日時: 5月16日(土) 18:00~20:00
- ・会場: 日本イタリア京都会館 本校
- ・費用: 無 料
- ・定員: 40名 先着順
- ・講師: クラウディオ・ジュンタ  
(トレント大学文学部准教授)  
浦一章(東京大学文学部准教授)

#### カンツォーネ講習会

- ・日時: 6月5日(金) 14:00~16:00  
6月19日(金) 14:00~16:00
- ・会場: 日本イタリア京都会館 本校
- ・費用: 2回分一括 維持会員 4,000円、  
受講生・一般 5,000円
- ・各回 維持会員 2,500円、受講生・一般  
3,000円
- ・定員: 30名 先着順

編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館  
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4  
TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357  
E-mail: centro@italia.on.arena.ne.jp  
URL: http://www.italia.on.arena.ne.jp